

III

福島県内で活用されている道徳教材、および実際の授業内容をまとめました。

放射線と私、放射線と社会

福島の復興にどう貢献するのか

被災し、避難している状況に対して、どのように向き合っていけばよいのか。福島に暮らす自分のアイデンティティを構築すること、また、福島の復興のために、自分はどうに貢献できるのかを、考えるきっかけを与える授業が行われている。



郡山市で行われた授業では、福島第一原子力発電所で作業員として働いていた地元の方から、現場の様子や作業員たちの思いが語られた(写真提供: 佐々木清氏)

「放射能がうつる」は差別である

未知のものに対して、忌み嫌い避けるべきものとしてレッテルを貼り、排除しようとする心理によって差別が生まれる。見えない匂いもしない放射線に対しても、恐怖と不安を多くの人が抱き、福島の人々への偏見と差別が生まれた。

福島からの転校生が「放射能がうつる」といわれた、病院で診察を断られた、レストランで入店を拒否された、などの事例が報道されたが、それらの事象は、偏見と差別による人権問題である。

絆に支えられる個人と社会

地震と原子力災害は、コミュニティにおける人と人とのつながりの大切さ、緊急時でも壊れない絆を日ごろからつくっておくことの重要性を、改めて認識する機会となった。

そのための道徳教育として、「自分は家族や友人、その他数多くの人々の支えによって生きていること」や、「個人と社会を成り立たせているものは、他人を思いやり、互いに励まし合う、人と人との絆である」ことが教えられている。

未来館からのポイント!

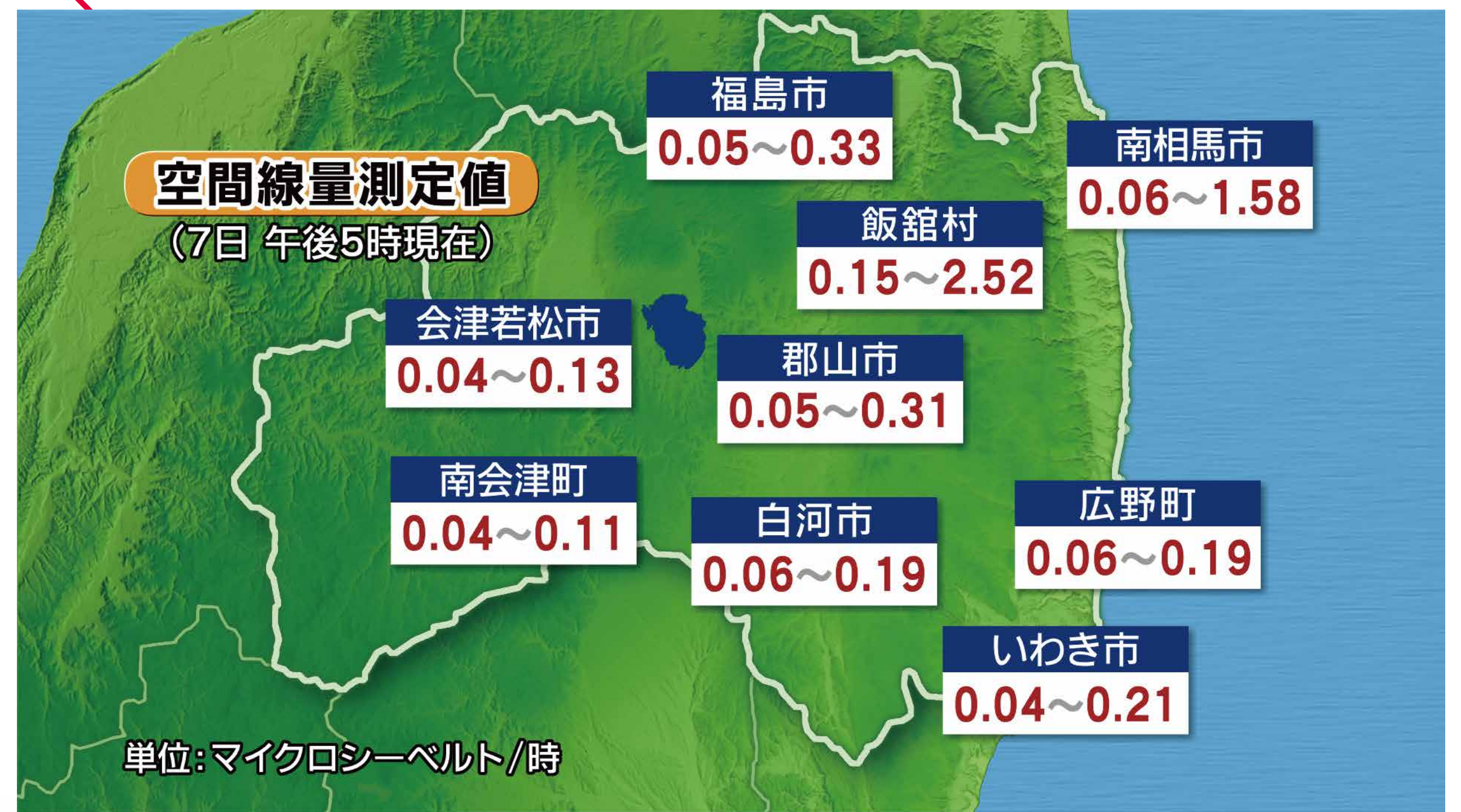
忘れないために必要なこと

原子力災害で被災した人々にとって、今のコミュニティの姿には、放射線のストーリーが織り込まれていると言えるかもしれません。

一方、東京を含む、放射能汚染が比較的深刻でなかった福島県外の地域では、人々は、放射線を再び意識の外へと追いやり、安心しようとしています。福島を忘れずに、3.11の背後に存在する問題の本質を見つめ続けるために、私たちはどのような活動を行っていく必要があるのでしょうか?

2016年10月7日の空間線量値

福島県ではテレビの天気予報において、放射線情報も毎日提供されている(画像提供: 福島中央テレビ)



公園に設置されている放射線空間線量モニタリングポスト(郡山市 2016年1月)

本展示の分析のために参照した主な教材

- 「小学生、中学生、高校生のための放射線副読本解説編(教師用)」文部科学省(2011)
- 「小学生、中学生、高校生のための放射線副読本」文部科学省(2011)
- 「放射線に関する指導資料 第3,4,5版」福島県教育委員会(2014, 2015, 2016)
- 「ふくしま道徳教育資料集 第I, II, III集」福島県教育委員会(2013, 2014, 2015)
- 「データでなっとく放射線まんが「なすびのギモン」～身の回りの放射性物質編, ~食品編, ~健康影響編」環境省、除染情報プラザ(2015)
- 「放射線による健康影響等に関する統一的な基礎資料(平成27年度版) -第6章 健康管理 Q&A」環境省(2015)
- 「『放射線教育5年目』の歩み一人ひとりのつながりを大切に放射線教育および9年間を見通した小・中学校連携放射線教育の展開」佐々木清(2016)
- 福島県環境創造センター交流館「コミュニケーション福島」の展示
- 「Science Window『放射線ってなあに?』」科学技術振興機構(2013)
- 「みらいへのとびら～知って、考えて、話してみよう自分のこと、みんなのこと、放射能のこと」セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン(2016)
- 「本当のところを教えて!放射線のリスク放射線影響研究者からのメッセージ」日本放射線影響学会 Q&A対応グループ編(2014)